

Title	『和歌無底抄』諸本の考察
Sub Title	The variant texts of "Waka-muteisho"
Author	館野, 文昭(Tateno, Fumiaki)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2014
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.49 (2014.) ,p.279- 312
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20140000-0279

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『和歌無底抄』諸本の考察

館野文昭

はじめに

鎌倉期には数多くの秘伝的な歌学書が成立したと考えられているが、その中に『和歌三重大事』『和歌大綱』『和歌肝要』『悦

目抄』『和歌無底抄』といった、相互に密接な関わりを持つ一群の書がある。三輪正胤氏が「悦目抄」系歌論」と呼ぶ歌学書群である。^(注1)三輪氏は、「これら一連の書の中には、二条為世が関係していたという奥書類があ」ということから、これらの諸書の性格について、「為世を取り巻き、為世を頭に頂くと称する人々がいて、これらの書を作成したと考えられるので、

為世流の書と称してよいもの」とされ、「為世流」の秘伝書として位置づけている。^(注2)本稿では、このうち『和歌無底抄』(三輪氏が「和歌無底抄系」とする書に焦点を絞り、その諸本の問題について考察するものである。

『和歌無底抄』については、古くは江戸末期の清水光房(一八六五)『和歌無底抄考』^(注3)以来、現在まで研究が積み重ねられている。この歌学書について、最新の和歌文学研究の専門辞典である『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー、二〇一四)は、次のように説明している。

【鎌倉期歌学書】基俊に仮託された伝書。『和歌無底抄』の書名は延宝(1723～81)刊本による。同本は十巻本で、

①巻一～四は四季の題の詠みかたを詳しく述べたもので、『八雲御抄』に拠るところが大きい。②巻五～七は『悦目抄』と同じ、③巻八～十は『上抄抄』と同じで、人丸奉行念誦次第、伊勢物語極秘、古今和歌序などとなっている。同内容の写本は書名を『和歌大綱上抄抄』（宮内庁書陵部蔵など）とする。ほかに『一子伝』という名の書があり、中間の『悦目抄』部分がないもの（広島大学蔵）、『悦目抄』と『上抄抄』から成る本（筑波大学蔵本）などがあり、伝来は複雑である。

【参考文献】『国文学の文献学的研究』佐佐木信綱（岩波書店 1935）＊『歌学秘伝の研究』三輪正胤（風間書房 1994）（紙宏行氏執筆、傍線・波線は引用者による）

これが、現在の研究状況における本書に関する基本的認識と云って良い。本書は、藤原基俊仮託の歌学秘伝の書であり、傍線部①～③の通りに全体が三つの部分に分けられ、その第二部分が『悦目抄』と同じ内容となっている。即ち、『和歌無底抄』は、『悦目抄』を含む、より大部の書物ということが明らかになっている。また波線部の通り、その諸本は非常に複雑な様相を呈しており、三輪氏が有益な見取り図（後述）を提示しては

いるものの、まだ考究すべき問題は多く残されている。その全容解明の一階梯として、『和歌無底抄』諸本の比較を通して、その原初的な性格はどのようなものであったのかを探りたい。

また、『和歌無底抄』は『日本歌学大系』第四巻（風間書房、一九五六）に収録されるが、所引の辞典項目でも言及されている、延宝四（一六七六）年の刊記を持つ版本が底本となっている。この延宝版本は十巻構成で、巻五～七が『悦目抄』に相当する。『日本歌学大系』においては、この『悦目抄』相当部分を省略して翻刻が為されている。『日本歌学大系』同巻には、『悦目抄』も収録されるので、巻五～巻七についてはそちらを参照すべし、ということなのである。この『日本歌学大系』所収本文が唯一の活字化されたテキストであり、研究者の間で流布本的地位を得ている以上、その底本たる延宝版本が、『和歌無底抄』諸本において、どのような位置付けが為され得るものなのかを明らかにしておく必要もあろう。その点も併せて検討してみたい。

本稿では、『和歌無底抄』の内容の出入りについても見てゆくが、その際、先の引用部に付した①～③の三つの部分をそれぞれ内容①②③と呼ぶこととする。

一、序文について

まず最初に、『和歌無底抄』の序文について説明しておきたい。

諸本の内、内容①を持つ伝本の多くは、①の前に真名と仮名の両序を持つ。この序文には、『和歌無底抄』諸本について考える際に重要な情報が含まれているように思われる。ここで両序の全文を引用しつつ確認を行う。(注)

まずは真名序を掲げよう。

夫和調者、我朝之風俗、興自神代盛人代、詠物也、專素艷色於詞林、偏表幽玄於言花。而其理深而難悟、疑開之門閉之、其義広而易迷、昏衢之道渺々。爰恐視聽之不達、(勢)愁歌人之竊目、自对委問之輩、盍慙才藝之少乎。故家々髓腦、雖加披見、面々綜縞、難息停滯。因茲、始於曩昔、迄于當時至、每望詠花嘯月之宴、染筆採餞之砌、伺之欽之、未得真底。誠及澆季、既絶知人。悲哉々々。難波津之遺流、浅香山之芳躅、衰干今、癡於是。仍為瀝細流、遷古風、三卷書、所注如件。

内容は、そもそも和歌とはどういうものか、というところか

ら筆を起こし、本書撰述の経緯を趣旨を述べるといふ、序文としては典型的なもので、特に変わったところがある訳ではないが、最後に「三卷書」とあり、この書物が三卷から成ることが示される点には注意しておきたい。ただし、ここでは三卷がそれぞれどのような構成をとるかの説明は無い。

一方、仮名序は次の通りである。

抑和歌と云は、神代より始て今に絶る事なければ、いひもらしける詞もなく、つゞけ残したる風情もなし。代のすゑの人、いかでかあたらしくもとりなすべき。しかはあれども、人の心面のごとくして、人ごとに心かはる物なれば、哥又心をたねとするがゆへに、人の哥にすこしきかはらずといふ事なし。をのづからもひきかへつれば、ゆるさる、ものをや。かるがゆへに、高も卑も秋津嶋に生れん物は、このみ詠べけれども、情あるものは進み、情なきものは進まず。たとへば、水にすむ魚のひれをうしなひ、空をかける鳥の翅おひざらんがごとし。凡哥のおこり、古今の序、和歌式にみえたり。代もあがり、人の心もたくみなりし時、春夏秋冬につけて、春は花をもてあそび、夏は神南備山の郭公を待、秋は立田山の紅葉をおしめ、冬はたかねの雪を

おもしろしとおもひ、君を祝ひ、我身を愁へ、いもせの中をあはれとおもひ、旅の別をおしみ、世中のうつりかはるにつけて、ことにのぞみ、思をのぶるにつけても、のこるふしなかるべし。夫哥にあまたの姿をわかち、八の病を注し、九の品をあらはして、いとけなき者をおしへ、おろかなる心をさとしめんがために注しをく所なり。是かならずしも筆のつひへをからず、みんなもの、目やすからんをおもふがゆへなり。又きかんもの、耳ちかくして、むなしき詞をかざらず、たゞまことのためしをあつむ。たゞし、つ

たなき身をかへりみるに、春の鶯のさへつりをまなばざれば、糸竹の曲にうとく、秋の螢の光をあつめずして、風月の望にくらし。藝なく能かけたり。なす事もなくて、いたづらに露霜ををくり、鳩の杖にすがれり。かゝるにつけては、藻塩草かきあやまれることのはも数つもあり、梓弓ひきみんなの嘲もはづれがたくおほゆれども、いまだ此道にうとからん嬰兒のためにしるす所なり。付名に、大綱初心・大綱之大綱・引括といふ。此三巻は以名字可秘也。初心部には、和哥序、文字仕、題目証哥を注す。大綱之大綱に、和哥会作法、由緒并証哥・連哥注す。大綱の引括には、哥

奥儀、不可得極秘哥、古今序、六義、四病八病、人丸或伊勢物語の極秘哥、古今の哥を明に注す。此三巻に名字三あるべし。大綱・一目・上抄抄、是なり。初心の部には四季雜の残れるふしもなし。下巻もて灌頂の巻とする也。

そもそも和歌とはいかなるものか、という話題から説き起こし、書物の撰述の動機、さらに書物の構成を説明するという、典型的な形式の序文であるという点では真名序と同じであるが、真名序よりも長文であり、説かれる内容にも聊か異同が見られ、両者は対応関係にあるものではない。例えば、真名序では撰述の目的を「為瀝細流、遷古風」とするが、仮名序では「いまだ此道にうとからん嬰兒のためしるす」と言っている。本書の成立については謎が多いが、あるいはこの二つの序文は、始原的にはそれぞれ別々に成ったものである可能性もあろう。猶、藤原基俊に仮託された奥書には「為末代嬰兒」という文言があるので、仮名序の方が、奥書と対応しているようである。

さて、問題は傍線を付した、「付名に：」以下の本文である。真名序ではただ「三巻書」とあるのみであったが、仮名序ではその三巻について解説されるのである。これによると、三巻にはそれぞれ「大綱初心」「大綱之大綱」「大綱引括」という名が

付されている。多分に秘伝的な名称ではあるが、さらにそれがどのような内容を持つのかということについて、具体的に述べられている。

ただし、実際の内容と、ここで述べられている構成とは一致しない。仮名序に従えば、上巻には「和歌序、文字仕、題目証歌」が記されていなければならないのであるが、実際の内容①を見ると、内題を「大綱初心」とする点こそこの序に合致するものの、その内容は四季題の読み方について述べたものである。中巻の内容とされる「和歌会作法、由緒并証歌・連歌」については、本書のどこにもこれに相当する内容は存在しない。下巻の内容とされる、「哥奥儀、不可得極秘哥、古今序、六義、四病八病、人丸或伊勢物語の極秘哥、古今の哥」に関して言えば、「古今序」「人丸或伊勢物語の極秘哥」といった辺りは、ある程度は本書の内容③と重なるものの、完全に符号している訳ではない。諸本を見ても、仮名序の述べる内容を備えるものは見当たらない。

この仮名序が述べる通りの構成をとるテキストが原初的に存在したのかは不明であり、現在の伝本状況から推測するのは困難である。猶、延宝版本も仮名序を有するが、傍線部分は脱し

ている。

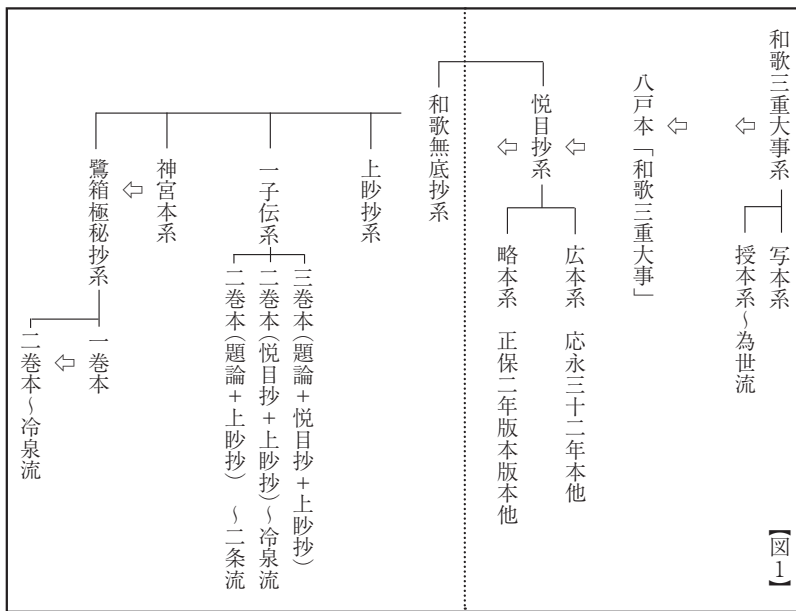
以上のように、本書の序文は大きな問題を孕んでいるのである。

二、『和歌無底抄』諸本に関する先行研究と問題点

つづいて、『和歌無底抄』を含む、『悦目抄』系歌論の先行研究と、その問題点について記しておきたい。これについては別稿で述べたところでもあるが、行論の都合上、再説する。

現在、『和歌無底抄』の研究水準を示しているのが、先述の三輪正胤氏の研究である。三輪氏は「為世流」の秘伝書として、『悦目抄』系歌論の諸書を精査して、その諸本整理を端的に表した見取り図を示されている。その図を本稿に関わる部分を中心に単純化すると【図1】の通りである。

即ち、『和歌三重大事』を原拠として『悦目抄』(悦目抄系)が成り、それが増補改訂されて和歌無底抄系の諸書が成ったとされる。『悦目抄』には広本系と略本系とがあり、『日本歌学大系』が底本とする応永三十二年本は前者、版本等が後者となる。必ずしも題が一定しておらず、これらの諸本については、どこま



【図1】

を同一書目、どこからを別書目とするか、その認定が非常に難しいところであるが、本稿では三輪氏が和歌無底抄系として捉える諸書・諸本（【図1】の点線部から左側）を『和歌無底抄』の諸本として捉えたい。猶、『和歌無底抄』を、この諸本全体を包括する通行書名とすることは、実は非常に問題があるが、現在この歌学書は『和歌無底抄』という題で通行し、文学辞典等でもこの題で立項されているので、ひとまず暫定的処置として『和歌無底抄』と呼ぶこととする。

【図1】の通り、三輪氏は『和歌無底抄』諸本を四系統七種に分類している。『和歌無底抄』は、「為世流」という大枠の中で捉えられているものの、冷泉流も諸本の生成伝来に関与した形跡があり、その諸本の状況が、複雑なものとなっていることが示されている。この分類・整理は諸本を精査した上で為されたものであり、基本的に首肯出来るものである。因みに、【図1】における題論というのは本稿でいう内容①、悦目抄は内容②、上抄抄は内容③のことである。

その一方、部矢祥子氏が、右の分類でいうところの一子伝系二巻本（題論+上抄抄）に属する重要伝本を、紹介、考察している。龍谷大学図書館蔵本『大綱初心』（写字台文庫、函架番

号 021・392・1、一冊、以下龍大本と称する) という伝本がそれである。内容①②③のうち①と③を持ち②を欠くものであるが、本文冒頭(①の前)に真名・仮名の両序を備える。龍大本は、

甘露寺親長(一四二四―一五〇〇)筆、足利義尚(一四六五―一四八九)所持本という、書写年代も古く、素性の良い伝本である。『悦目抄』および龍大本の奥書構成は後掲の〈表〉を参照されたいが、『悦目抄』には、為氏・為世らの二条家関係者が伝来に関与したという奥書が付されることが知られている。

『和歌無底抄』版本等にも、その『悦目抄』と同文の為氏・為世の奥書がある。しかし龍大本には、為氏・為世という二条家関係者の奥書が無い。その点に注目した部矢氏は、『和歌無底抄』が『悦目抄』を敷衍して成ったという通説を疑問視する。さらに龍大本の仮名序が述べる中巻の内容構成と『悦目抄』の内容が一致しないという点、①と③の間に、②『悦目抄』が入る伝本が何れも近世以降のものであるということ指摘し、「悦目抄」は近世になって入れられた可能性が強く、「大綱の大綱」(中巻のこと。序文参照※引用者注)を『悦目抄』とするのは近世以降からと考えられる」と主張する。

つまり、部矢氏は、『和歌無底抄』は、元々は『悦目抄』と

は別個に成立し、近世になって、三巻相当の二巻目に『悦目抄』が挿入された結果、版本の如き形になっているとするのである。この部矢氏論は無視できない見解であろう。

ただし、龍大本も奥書は明らかに『悦目抄』と同文であり、無関係に成立したとは考えがたい。試みに龍大本と『悦目抄』がともに持つ釈阿奥書を比較してみよう。

龍大本	悦目抄
<p>師匠より相伝の秘書一卷ゆ づりたてまつり候。御心え のためにて候。これは羽林 よりほかは人に名をだにも きかせず候。ふかく箱のそ こにかくしてひろうあるま じく候。</p>	<p>師匠より相伝之秘書一卷奉 譲候。御心得のためにて候。 是は羽林<small>定巻</small>より外は人に名を だにも聞かせず候。ふかく 箱のそこにかくして披露あ るまじく候。あなかしこ、 く。</p>

両者は同文であり、本文の影響関係は明らかである。両者ともに傍線部のように「一卷」とあり、一卷乃至不分巻構成の書物であることになる。しかしながら、龍大本の真名序を見ると、「三巻書」とあり、また仮名序の書物全体の構成を述べた部分にも、

付名に大綱初心・大綱之大綱、大綱之引括といふ。此三巻

は以名字可秘也。…(中略)…此三卷に名字三あるべし。
大綱・一目・上抄抄、是なり。…(後略)

と自ら「三卷」構成であることを謳っており、釈阿奥書の「一卷」という言辭と矛盾する。龍大本は一冊本ではあるけれども、その構成は前半①と後半③とで明らかに違った内容・形式となっており、「一卷」というより「三卷」のうち一卷が失われていると見た方が自然である。一方『悦目抄』は本来的に不分巻の歌学書で、「一卷」と称しても問題の無い構成をしている。ということは、龍大本に存する奥書は、『悦目抄』のそれを、無批判にそのまま利用したものであると考えるのが妥当であると思われる。『和歌無底抄』諸本を見ると、どの系統の伝本においても『悦目抄』の影響を受けたと思しき奥書が付いているので、『和歌無底抄』は、その生成過程において『悦目抄』の影響を受けているものと考えたい。猶、三輪氏分類の二巻本(悦目抄+上抄抄)の伝本には室町期の書写本と推定されるものも存するから、『悦目抄』との接触を江戸期とする部矢氏説にはやはり従えない。

とはいえ、龍大本が『和歌無底抄』研究にとって重要な古写善本であることは間違いない。龍大本が諸本の中でも古態を示

す伝本であることが確認出来れば、その奥書に二条家関係者の名が見えないという事実は重要な意味を持つことになる。『悦目抄』は原則として伝来に為氏・為世が関与していることを示す奥書を持っているので、『和歌無底抄』に『悦目抄』の奥書を取り込む際、意図的に為氏・為世の名が削除されたということになるからである。そうなると、「為世流」の伝書として位置づけられている『和歌無底抄』は、本来的には二条流とは別の、相伝の秘書に為氏・為世が関わっていたら都合が悪いと考えるような人々によって創出・享受されたものではないかという疑いも生じるのである。

『和歌無底抄』は原初的にはどのような場で生成したものか、この点について、諸本比較から考えてみたい。

三、『和歌無底抄』諸伝本について

検討に先立ち、三輪氏の整理を参考にしつつ、本稿の考察の対象となる『和歌無底抄』諸伝本について、簡略にはあるが概観しておきたい。先の【図1】の如く、三輪氏は、『和歌無底抄』諸本を、「上抄抄系」・「一子伝系」・「神宮本系」・「鷲箱

極秘抄系」の四系に分け、「一子伝系」をさらに内容の出入りから、内容①②③を備える三巻本（題論＋悦目抄＋上抄抄）、①を欠く二巻本（悦目抄＋上抄抄）、②を欠く二巻本（題論＋上抄抄）の三種に、「鶯箱極秘抄系」を一巻本・二巻本に分けている。以下、上記の七種について便宜的にi～viiと番号を付し、どのような伝本が確認出来るのか、確認しておこう。

i 上抄抄系

三輪氏が「上抄抄系」と名付けたのは、内容①②③の内、③の内容のみを持つものである。三輪氏は宮内庁書陵部本、片野達郎氏本、神宮文庫本を挙げる。何れもiii一子伝系二巻本（悦目抄＋上抄抄）の内、③の部分を分離独立させたものであることが三輪氏により以下の通り指摘されている。

通常、内容③は「人丸奉行念誦次第」から始まるが、この内書陵部本はその前に「万葉の歌は安きをかくし…」および「人丸の秘歌」という二項目を記し、片野本は「人丸の秘歌」の項目を記している。この二項目は、後述するiii一子伝系二巻本（悦目抄＋上抄抄）の内容②の末尾に存する独自異文二項目と同じものである。これはiii一子伝系二巻本（悦目抄＋上抄抄）の内

容③の部分を分離独立させた結果生じたものであると考えられる。また、神宮文庫本は奥書にiii一子伝系二巻本（悦目抄＋上抄抄）に属する筑波大学図書館本と同じ奥書を、誤読しながら写しており、これもやはり、この系統の伝本から、③の部分を分離独立させたものであると考えられるのである。

このように、i 上抄抄系というのは、iii一子伝系二巻本（悦目抄＋上抄抄）に遅れて生じた系統であり、原初的形態を考える際には、考察の対象から除外して差し支えないと言える。そのため、〈表〉にはこの系統の伝本は掲げていない。

ii 一子伝系三巻本

『和歌無底抄』諸本において、内容①②③を全て備えているものはこの系統に属する。版本『和歌無底抄』もこの類である。内容②が「悦目抄」と同じ内容であることは先述の通りであるが、ここに属する伝本の内容②は、広本系『悦目抄』ではなく略本系『悦目抄』である。また、内容①の前に真名・仮名の両序を持つという特徴がある。ただし、版本(6)及びその転写本二本(7・8)は真名序を持たない。

以下、現在確認し得た伝本は次の通り。

- 1 国会図書館蔵『基俊和歌口傳抄』 三卷三冊 200・3・
45〔江戸時代中後期頃〕写
 - 2 九州大学図書館蔵『和歌大綱上抄抄』 三卷三冊 國
文・26B・27〔江戸時代中期頃力〕写
 - 3 宮内庁書陵部蔵『和歌大綱上抄抄』 三卷三冊 鷹136
嘉永六年鷹司政通令書写
 - 4 宮城県立図書館伊達文庫蔵『和歌大綱』 三卷三冊 伊
911・201・60〔江戸時代中後期頃力〕写
 - 5 篠山市青山会蔵『和歌大綱』 三卷三冊 327〔江戸時代
中後期頃力〕写
 - 6 版本『和歌無底抄』 十卷十冊または十卷三冊 延宝四
年江戸林左兵衛刊^(注15)
 - 7 國學院大學図書館蔵『和歌無底抄』 十卷三冊 IV・5889・
3〔江戸時代中後期頃〕写 版本の転写本^(注15)
 - 8 東京大学国文学研究室蔵『和歌無底抄』 十卷三冊 三
浦44 文化六年写 版本の転写本^(注15)
- 以下の二本は、内容①及び真名・仮名の両序を欠くが、本文・
奥書等から明らかにiiの諸本と同系統であり、iiiとは異なる。
後述するように、これは元々内容①②③完備していたが、何ら

かの事情で①及び真名・仮名の両序の落ちてしまった本を写し
たことにより生じた伝本と思われる。

9 群馬大学図書館新田文庫蔵『基俊和歌口傳』 二卷二冊
N 911・101・F 68〔江戸時代中期頃〕写

10 大東急記念文庫蔵『基俊和歌口傳』 二卷二冊 41・

1・2・2975〔江戸時代後期頃〕写（群馬大本の転写本）

この類からは、1・6・9をⅧ・Ⅸ・Ⅶとして〈表〉に掲げた。

iii 一子伝系二卷本（悦目抄＋上抄抄）

『和歌無底抄』諸本において、内容②③を持ち①を欠くもの。

この類に属する伝本内容②は、略本系『悦目抄』ではなく広本
系『悦目抄』に近い本文を持つものであるが、歌学大系本とは
大きく異なる点として、「一、又憚るべき名所ならびに詞の事」
〔日本歌学大系〕一七五頁〔三行目〕以下の本文を欠き、そのか
わり、末尾に「一、万葉集の哥は」「一、人丸の哥」の二項目
を独自異文として付すという特徴がある。iiに分類した群馬大
学本やその転写本である大東急本も②③という内容構成となっ
ているものの、②の本文に右の如き特徴は見られないので、iii
には分類しなかった。

先述の通り、i上抄抄系はこの系統の伝本から内容③の部分
を独立させたものである。

存在を確認し得る伝本は次の通り。

1 佐々木孝浩氏蔵『和歌』綴葉装一帖〔室町時代中期頃〕
写

2 筑波大学図書館蔵『二子伝』一冊 ル205・72〔江戸時
代前期頃〕写

3 陽明文庫蔵『上抄抄』二卷二冊 近243・31〔室町時代
後期頃〕写

この類からは室町期の書写本である1・3をIV・Vとして
〈表〉に掲げた。

iv 一子伝系二卷本（題論＋上抄抄）

『和歌無底抄』諸本において、内容①③を持ち、②を欠くもの。

真名・仮名の両序も備える。

存在を確認し得た伝本は次の七点である。

1 龍谷大学図書館蔵『大綱初心』一冊 021・392・1〔甘
露寺親長〕写 足利義尚所持本

2 国立国会図書館蔵『大綱初心抄』一冊 237・100〔江

戸時代前期頃〕写 久世家旧蔵

3 広島大学国文学研究室蔵『二子伝』一冊 国文N
3523〔江戸時代中後期頃〕写

4 東京大学附属図書館蔵『大綱初心抄』一冊 A00・6042
〔江戸時代前期頃〕写

5 東海大学桃園文庫蔵『大綱初心／伊勢物語極秘』一冊
桃3・4〔江戸時代後期頃〕写

6 彰考館蔵『二子伝』二冊 已18—07479〔江戸時代前期頃カ〕
写

7 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵『二子伝』一冊
091・ト312・1〔江戸時代中期頃〕写 柳原家旧蔵・久
曾神昇氏旧蔵

1 龍大本は前節で言及した伝本である。2 国会本・3 広大本・
4 東大附属図書館本・5 東海大桃園文庫本は何れも龍大本の義
尚自筆所持奥書と同じ奥書を、本奥書として持つ。ここでは書
写年代も古く、素性も良い伝本である1と、参考資料として義
尚の奥書の見えない6を、それぞれII・IIIとして〈表〉に掲げた。

v 神宮本系

備考	書写	奥書 構成	外題	内容	函架番号	所蔵
基本一冊(帖)。版本は一冊または二冊。	〔甘露寺親長〕写	れ以降は諸本により様々) (一)一)まで諸本に共通、こ 7 正安元年二月十七日・ 為世奥書 6 起請文	「悦目抄」等 1 基俊奥書 2 积阿奥書 3 藤原氏奥書 4 妙阿奥書 5 為氏奥書	② 基本的ナシ	021・392・1	I 〔悦目抄〕 II 龍谷大学図書館
一冊。国文研所蔵紙焼写真版を閲覧。	江戸前期頃写カ	6 足利義尚筆所持奥書・ 前上総介範政 自筆花押	1 起請文 2 基俊奥書 3 积阿奥書 4 藤原氏女奥書	③「和歌灌頂に有覚」 ①「大綱初心卷第一」 ②「和歌灌頂に有覚」 一子伝	真仮①③ 已18 07479	III 彰考館
綴葉装一帖。	室町中期頃写	7 前僧長院無動求之(後筆)	1 起請文 2 基俊奥書 3 积阿奥書 4 無署名相伝奥書(他本の藤原氏女奥書に同じ) 5 相伝系図 6 文保元年八月廿二日 書之(本奥書)	和歌 ③「和歌灌頂に有覚」 ②ナシ	②③	IV 佐々木孝浩氏
二卷。一冊。	室町後期頃写	7 花押の模写 6 千松末葉正徹奥書	1 起請文 2 基俊奥書 3 积阿奥書 4 藤原氏奥書 5 (尾題)	上抄抄(悦目抄トモ) 抄下/和歌灌頂に有覚」 ②「上抄抄上」③「上抄抄下」	近243・31 ②③	V 陽明文庫

〈表〉 ※内容の①は「和歌無底抄」巻一〜四、②は五〜七、③は八〜十相当部分。真は真名序、仮は仮名序。

備考	書写	奥書 構成	外題	内題	内容	函架 番号	所蔵
一冊。②③本文は特異な形をとる	元禄十六年写	嘉臥奥書 10 元禄十六、玩歌齋／ 9 天台隱士鎮海奥書 8 文明元年九月四日 7 (建武二年)前内大臣奥書	引括鈔 <small>（朱筆）</small> 「又号悦目抄」	ナシ	② ③	201・748	内閣文庫 VI
上下二卷。二冊。	江戸中期頃写	11 天明二寅年五月吉旦、源孝純／源温純奥書（後筆） 10 従三位長治奥書 9 応永廿六年九月九日、前上総介範政奥書 8 義尚奥書	1～7まで「悦目抄」と同じ。	基俊和詞口伝	③「和歌灌頂に有覚」 ②「基俊和歌口伝」 ①③	N 911・101・F 68	群馬大学附属図書館 VII
三卷。三冊。	江戸中後期頃写		1～10まで群馬大本と同じ。	基俊和歌口伝抄	③「和歌灌頂に有覚」 ②ナシ ①「大綱初心卷第一」	200・3・45	国立国会図書館 VIII
十卷。十冊または三冊。	延宝四年刊	蔵板行） 兵衛板行（もしくは「林文 8 延宝第四仲夏日／林左 江戸浦留町	1～7まで「悦目抄」と同じ	和歌無底抄	「和歌無底抄卷第一 一名一子伝」「和歌無底抄卷第二（～十）」 「和歌無底抄」	版本「和歌無底抄」 （日本歌学大系底本） 飯①②③	IX

内容②③を持つが、②も③も他系統の諸本と比して、特殊な構成・内容となっている。^(注14)

伊勢神宮に伝来したことを示す奥書を有するという特徴がある。伝本としては、次の二本が確認されている。

1 内閣文庫本蔵『引括抄』一冊 201・748 元禄十六年嘉

臥写

2 名古屋大学蔵『悦目集』一冊 W 皇 911・E・0 天文三年
年宋竹入道写

〈表〉には1をVIとして掲げた。

vi 鷲箱極秘抄系一卷本・vii 鷲箱極秘抄系二巻本

先の【図1】の矢印が示す通り、神宮本系が変容して生じた系統と考えられる。一卷本と二巻本にわかれる。二巻本は一卷本が増補されて成ったと思われる。三輪氏は、一卷本として、天理大学図書館本、東京大学図書館本、中央大学図書館本、国文学研究資料館寄託久松本、中田光子氏蔵本を、二巻本として宮内庁書陵部蔵伏見宮本、三輪氏蔵二本を挙げている。原初的形態の考察の際は除外して良いものと思われるので、この系統の伝本は、〈表〉には掲げていない。

四、『和歌無底抄』諸本の内容・奥書比較

さて、『和歌無底抄』の諸本を比較することで何が見えてくるだろうか。

〈表〉として、Iに『悦目抄』の奥書構成を記し、II～IXとして『和歌無底抄』諸本の、題、内容、奥書について整理した表を掲げた。ここに挙げた伝本は全体からすると一部に過ぎないが、『和歌無底抄』の原初的形を十分考察することが可能である。前節で述べた如く、三輪氏の整理でいうi上抄抄系とvi・vii 鷲箱極秘抄系は、何れも『和歌無底抄』諸本の原初的形態をとどめるものではないと考えられるので、ここでは省略した。また、この〈表〉では「奥書構成」については、どの本にどのような奥書が存するかを一覧するためのものであり、奥書本文の忠実な引用を目的としない点、諒とされたい。以下、この〈表〉に基づいて考察をすすめてゆく。

『悦目抄』の奥書に関しては、諸本により様々であるが、基本的に〈表〉で示した1の基俊奥書から7の為世奥書までは、諸本ともに持つ。1～7までを完備しない伝本も存するが、そ

れは転写の過程で省略されたもので、元来は1〜7まで完備していたと考えられる。つまり『悦目抄』を二条為世流の秘伝書と呼ぶことは問題ないと言える。

では、『和歌無底抄』諸本も為世流の秘伝書と呼んで差し支えないものだろうか。かかる問題意識のもと、以下、『和歌無底抄』の原初的人格を考察し、版本『和歌無底抄』の位置付けについても考えてゆきたい。

まず、『和歌無底抄』という題を持つ伝本について見てみよう。この題を持つのは、IX延宝版本のほか、写本で確認し得たのは、この表に挙げていないもので國學院大學図書館本、東京大学国文学研究室蔵本があるのみである。何れも十巻構成をとるが、ともに版本の転写本と見て間違いない。『和歌無底抄』という題を持ち、十巻構成をとるのは、版本に由来するものだと考えて良いかと思われる。そうであれば、『和歌無底抄』という題も、成立当初からの題では無く、あるいは版本化の際付されたものである可能性が高い。

以上を勘案すれば、『和歌無底抄』という題を持つ諸本（版本及びその転写本）については、近世になって整えられた形をとるものと見做し得るものであり、諸本の原初的形態の

考察に際しては、ひとまず除外しても問題ないと思われる。

現在この歌学書は『和歌無底抄』という題で通行し、文学辞典等でもこの題で立項されている。しかしこの題は先述の通り、近世期に成立したと考えられる版本系諸本にのみ用いられているものである。したがってこの『和歌無底抄』を通行書名とするのは聊か問題があるだろう。しかしそれに代えて用いるべき適切な書名が見られないため、本稿では『和歌無底抄』を通行書名としておく。

五、未改編奥書本と改編奥書本

再び〈表〉を参照されたい。版本IXを除いた『和歌無底抄』系諸本の奥書に注目すると、VII群馬大本・VIII国会本といった、『悦目抄』1〜7と同じように為氏・為世という二条家の人物の名が見える奥書を持つ諸本がある。その一方、第二節で言及したII龍大本のようにそうでないものもある。どちらが原型に近いものであろうか。前者を代表して国会図書館本、後者を代表して龍大本の、奥書を掲げよう。煩瑣を避けて、一部省略して引用する。対応する奥書同士がなるべく同行になるように並

<p>抑此書者：(中略)穴賢々々。／年月日／<small>本右位俊成</small>前左衛門佐基俊(在判)(1) <small>本右位俊成</small>師匠より相伝の秘書一卷ゆづり奉り候。…(中略)：披露あるまじく候。あなかしこく。／五条三位入道俊成／积阿(在判)(2) としごろ浅からず此道に：(中略)：披露なく秘し思はれ候べく候。／俊成女越部尼御前／藤原氏女(在判)(3) 此秘書は子より外に：(中略)あなかしこく。／妙阿(在判)(4) 書を相伝せんとて起請文をかき侍り。…(中略)あなかしこく。／為氏(在判)(5) 定申起請文／右件元者上抄抄非実子者、不可相承。…(中略)：仍起請文如件。(6) 当家相伝書：努々不及外見而已。／正安元年／二月十七日 前大納言為世(在判)(7) <small>本右位俊成</small>右秘抄雖無直伝、彼作依為希代物、所秘藏也。／<small>(足利義尚)</small>義尚(在判)(8) <small>(足利義尚)</small>右一冊將軍家常徳院殿以自筆之本書写一校畢。／<small>(二四一九)</small>応永廿六年／九月九日 前上総介範政(判)(9) 此一冊以光広朝臣本書写一校畢。／<small>(竹内)</small>從三位長治(判)(10)</p>	<p>(本文末尾) 一、此抄を無左右人に相承すべからず。さる間末代人相伝せんと思はゞ、此起請文の旨をまもりて、かつは道を重ずべし。／立申起請文事／右件元者上抄抄非実子者不可相承…(中略)：仍起請文状如件。(4) 抑此書者：(中略)：穴賢々々。／年月日 <small>本右位俊成</small>前左衛門佐基俊(在判)(1) <small>本右位俊成</small>師匠より相伝の秘書一卷ゆづりたてまつり候。…(中略)：ひろうあるまじく候。／积阿(在判)(2) としごろ浅からず此道に：(中略)：ひろうなく秘し思はれ候べく候。穴賢々々。／藤原氏女(在判)(3) <small>本云</small>以此本令書写校合畢。／<small>(二四一九)</small>応永廿六年九月九日／前上総介範政(判)(9) <small>(足利義尚)</small>右秘抄雖無中卷、彼作依為希代物、所秘藏也。／<small>(足利義尚)</small>足利義尚花押(判)(8)</p>
--	--

べた。さらに龍大本の奥書は上段との対応関係を考慮して、順に・4・1・2・3・9とした(右頁の表)。

国会本の奥書1〜7は順序・本文ともに『悦目抄』の奥書1〜7と大凡同じものである。版本系(版本及びその転写本)以外でこのように『悦目抄』と同じ奥書を持つ諸本は、基本的にここにあげた国会本のように7為世奥書に続いて、8義尚の奥書があり、その後9今川範政奥書、10竹内長治奥書が続くという奥書構成をとる。^(注18)これは明らかに改編されたものである。

というのは、この奥書は、足利義尚筆の本を今川範政が書写したことを伝えているが、足利義尚は寛正六(一四六五)年生まれ、今川範政は永享五(一四三三)年没なので、応永二十六(一四一九)年に範政が義尚の本を用いて書写することは、年代的に不可能である。

一方、龍大本はまず、4起請文(『悦目抄』6と同じもの)を記し、それに続けて、1基俊、2釈阿、3藤原氏女の奥書(『悦目抄』1〜3と同じもの)を記す。その後、9範政奥書・8義尚奥書が書かれるが、義尚の所持奥書は自筆とみられるものである。義尚の奥書が範政の奥書の後に来ており、こちらが本来の順序であることがわかる。龍大本の転写の過程で、

奥書が変容して国会本のような形になったことは疑えないのである。また内容に関しては、龍大本が②を欠くのに対し、国会本は①②③を完備している。これは、転写の過程で①と③との間に②の内容が挿入されたものと考えられる。要するに、龍大本に発する伝本の一つが、既に広範に流布していた『悦目抄』と再び接触し、中巻として『悦目抄』が挿入されるとともに、奥書が『悦目抄』の持つ二条流のものに改編されたものと見られる。同時に、9範政奥書と8義尚奥書の順番も逆転したようである。その結果、この二つの奥書が有機的に結びつき、範政奥書の文中の「此本」が義尚自筆本を指すことになった。「此本」という元々の形では、範政が書写に用いた親本が不明瞭でわかりにくい。ある意味、わかりやすい形に奥書が改められているとも言える。

ここで注目しておきたいのが、龍大本の義尚の奥書中の「雖無中巻」という文辞である。義尚は自らが所持するこの本が三巻の書であり、かつ中巻が欠けているものであることを認識していたらしいのである。恐らく義尚は序文によって、自らの所持する歌学書が三巻からなる書であると判断したのと思われる。仮名序から、上巻が「大綱初心」、中巻が「大綱之大綱」、

下巻が「大綱引括」という名付けられているらしいことが判るが、龍大本の内容①は内題を「大綱初心巻第一」とするので、内容①を「大綱初心」、即ち上巻であると見做したのであろう。また、仮名序末尾に「下巻もて灌頂の巻とする也」とあるが、内容③の本文巻頭には「和歌灌頂に有覚」と記される。そうしたところから、内容③を灌頂巻、即ち下巻と見做したと思量される。結果、義尚は中巻が欠脱していると捉え、所持奥書に「雖無中巻」と記したものと見られる。一書として不完全な形であることを示す奥書が付されている訳だから、転写本の書写者の中に、中巻を補って完全な形にしようという意志を持つ者が現れるのは、ごく自然なことであろう。『悦目抄』が補われたのは、不完全なものを完全なものに再編するという意識によるのだろう。中巻が補われて、三巻書として完全な形となっている国会本等の諸本の奥書では本来「雖無中巻」とあった部分は「雖無直伝」と改められている（国会本の「虫くひにて不正」という傍記は氣になるが、この部分の本文が変更されたのは間違いない）。以下、龍大本をはじめとする改編されていない奥書を持つ諸本を「未改編奥書本」と呼び、国会本のような改編された奥書を持つ諸本を「改編奥書本」と呼ぶこととする。未改編奥書本

には内容①③を持ち②を欠く伝本（Ⅱ・Ⅲ）と、②③を持ち①を欠く伝本（Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ）がある。また改編奥書本も内容①②③を完備するもの（Ⅷ）と、①を欠く伝本（Ⅶ）が存する。また〈表〉には伝本を挙げていないが、三輪氏の言う「上抄抄系」の諸本は、前節で述べた通り、この①を欠く未改編奥書本の伝本から③を独立させたものであるから、これも未改編奥書本系統に属することになる。

Ⅵの内閣文庫本も未改編奥書本の一つであるが、他の諸本と異なる点が多い。1起請文、2基俊奥書、3釈阿奥書、4藤原氏女奥書と続く点は、本文に小異あるも、他の未改編奥書本と同じ構成であるが、それに続いて5妙阿奥書が続く点が異なる。この5妙阿奥書は『悦目抄』の4妙阿奥書と同じものである。〈表〉に挙げていないものでは、内閣本と同じく「神宮本系」と称される名古屋大学本も同様の奥書構成をとる。（注16）この系統は、他の未改編奥書本諸本の奥書よりも『悦目抄』の奥書をもつ多く持っていることになる。『和歌無底抄』は生成の過程で『悦目抄』の影響を受けていた訳だから、この系統と他の未改編奥書本とは、生成の過程において分岐したものと思われる。何れにせよ、「神宮本系」の二本は、内容②③の本文も他の未改編

奥書本諸本と異なる点が多く、異本的な位置付けをしておきたい。

ところで、改編奥書本は範政奥書の後に、「従三位長治」の奥書を持つ。この「従三位長治」とは、竹内長治（一五三六―一五八六）のことであると考えられる。竹内長治が従三位であったのは、『公卿補任』によれば、天正八（一五八〇）年から天正十三（一五八五）年までである。この長治奥書の中に「光広朝臣」という名が見える。「光広」という名からまず想起されるのは、烏丸光広（一五七九―一六三八）であろう。ただし、そう考えた場合、問題が生ずる。名字朝臣は四位の人に用いられるのが通例であるが、烏丸光広の叙従四位下は慶長四（一五九九）年十二月十一日であり（公卿補任）、長治の没後なのである。そもそも長治在従三位期間に、光広は二歳から七歳である。この段階で光広の本を長治が書写するというのは不審である。そうなる」と「光広朝臣」が別の人物である可能性もあるが、歌書を書写するような「光広朝臣」は他に見出し難い。8・9と同様に、ここでも奥書の順序の乱れが生じていると見るべきではないだろうか。即ち「此一冊以光広朝臣本書写一校畢」と、「従三位長治」は本来別個の奥書であったものと考えたい。光広は慶長十一（一六〇六）年正月十一日に参議となっており、

その後は「光広卿」と称された筈だから、「光広朝臣」と呼ばれたのはそれ以前ということになる。そうすると奥書の改編が行われたのは、慶長年間以降、即ち江戸期であると考えられる。周知の通り、『悦目抄』は江戸期には盛んに書写され、重んじられていた。^{注20} また二種の版本も板行され、^{注21} 流布していた。なので、江戸期において、龍大本の転写本が、三巻書を誦いながらも中巻に相当する部分を欠いた不完全な書であることに不審なした誰人かが、奥書が『悦目抄』と似ていることに着目し、この中巻にあたるのは『悦目抄』であると考え、①と③の間に『悦目抄』を挿入して完全な三巻の書物として「再生」させ、奥書も『悦目抄』式に改編したということであろう。形だけを見ると、非二条流の奥書が二条流のものへと書き換えられたことになるが、書物に二条流の性格を付与する意図が改編者にあつたとは直ちには言えないだろう。この問題については後に少し触れる。

六、改編奥書本と挿入された『悦目抄』

ところで、改編奥書本諸本の内容②（『悦目抄』部分）の最

一、人々遍昭寺にて月見侍けるに、山家秋月といふ事をよみけるその中に教長朝臣がその夜しも殿上の番にてまからざりけるを、主上うちやましくおもふらんとおほせくだされて、れうの御馬を給てのち、山へまかりて山家秋月といふ事をよみ侍りけり

とふ人もなき山里の秋の夜は

月のひかりもさびしかりけり

件の懐紙の草案どもを中納言とりて、公任卿の出家してこもりゐられたりける北山の長谷と云所へ見せにやれりければ、範永が哥をふかく感嘆して、草案のはしに、「範永誰人哉、和歌得其体」と書付られたりけるを、範永あまりの感にたへずして、その草案をこひとりて、錦の袋に入れて、宝物として、くびにかけて持たりけり。是こそほうびのある事なれ。かやうの事はよくくいたれる人のすべき也。あなかしこく。よくく思ひはからふべし。

一、人々遍昭寺にて月見侍けるに、山家秋月といふ事をよみけるその中に教長朝臣がその夜しも殿上の番にてまからざりけるを、主上うちやましく思ふらんとおほせ下されて、れうの御馬を給てのり山へ罷りて山家秋月といふことをよみ侍りけり

とふ人もなき山ざとのあきの夜は

月のひかりもさびしかりけり

件の懐紙の草案を中納言とりて、公任卿の出家してこもりゐられたりける北山の長谷と云所へみせにやれりければ、範永が哥をふかく感嘆して、草案のはしに、「範永誰人哉、和歌得其体」と書つけられたりけるを、範永あまりの感にたへずして、その草案をこひとりて、錦の袋に入れて、宝物として、くびにかけてもちたりけり。これこそほうびのかひ有ことなれ。かやうのことはよくくいたれる人のすべき也。あなかしこく。能々思ひはからふべし。

終項目の本文には特徴的な誤写がある。Ⅷ国会図書館本の形で引用する。参考までに版本『和歌無底抄』の同じ部分も併せて掲げる（右頁の表）。

猶、『悦目抄』は本来ならばこのあと跋文が続くが、内容③の跋文と本文的に重なるのたためであろうか、省略されている。

引用部は、『十訓抄』を典拠とする藤原範永の和歌説話であるが、傍線部に「教長」とあるのは、明らかに「範永」の誤りである。これは単純に「範永」を「のりなか」と仮名書きしていた本があり、それを「教長」と漢字を当てたため生じた誤りであると思われる。ここに挙げた国会本以外でも、改編奥書本諸本は共通してこの部分を「教長」と作っているのである。内容①を欠くⅡ群馬大学本も同様であることから、国会本等の内容①②③を完備する伝本と同系統であることがわかる。何らかの事情で内容①が欠けてしまったものであろう。そもそも、Ⅳ佐々木孝浩氏蔵本やⅤ陽明文庫本などの未改編奥書本諸本の内容②は、第二節で説明したように改編奥書本の内容②とは別系統とであり、この説話を載せていないのである。

また、下段で示した版本も同様に誤っていることから、改編奥書本諸本が持つ奥書8・9・10こそ持たないほか、巻立・真名序の有無等の種々の相違はあるものの、版本『和歌無底抄』

も、改編奥書本の類であるとわかるのである。上記の異同から、諸写本が版本の写しでないことは明らかである。とすると、①②③を完備した改編奥書本を板行の為に十巻に分ち、序を省略し、奥書を改め、「和歌無底抄」という題を付けたものが、版本『和歌無底抄』ということになる。

では、挿入に用いられた『悦目抄』が如何なる本であったのか、特定することは出来るだろうか。『悦目抄』は広本系と略本系とがあるが、改編奥書本の内容②を通読するに、略本系であることはすぐにわかる。『悦目抄』は江戸前期に二種の版本が刊行され流布したことは既に述べたが、この二種の版本は略本系に属す。

ここで、正保二（一六四五）年版本の範永説話部分の本文を見ると、

人々遍昭寺にて月見侍けるに、山家秋月と云事をよみける
その中に、教長朝臣がその夜しも殿上の番にて：（以下省
略）

と、改編奥書本諸本と同じく「範永」を「教長」と誤っているのである。^(注2)現在確認し得た改編奥書本は、皆江戸中期以降の書写と思しきものである。少なくとも正保年間を確実に遡る時期の書写と見られるものは未見である。版本『和歌無底抄』の刊

行も延宝期であり、正保二年版『悦目抄』の刊行後、約三十年が経過している。即ち、改編時に挿入された『悦目抄』本文には、正保二年版本もしくは非常に近い関係にある写本が利用された可能性が高い。

ただし、正保二年版本の奥書は、1基俊奥書から5為氏奥書までを記した後、起請文の本文と為氏奥書を省略し、為氏の署名のみ記すという特異な形を取る。しかし改編奥書本諸本の奥書はそのような形は取らないので、正保二年版本が利用されたと考えた場合、奥書に関しては、この正保版本以外の『悦目抄』が参照されたことになる。^(注2)

ここまでの考察の結果を踏まえて、『和歌無底抄』諸本についてまとめると次の通りである。『和歌無底抄』は生成の初期段階において、『悦目抄』の影響を受けて、奥書に『悦目抄』のものを利用した。その後室町期には①③の内容を持つ伝本と②③の内容を持つ伝本が流布した。全てを完備する伝本は早くに失われてしまったと思しく現存していない。^(注2)その後足利義尚の所持した龍大本の転写本が中巻を欠いていることに不審を為した者が、中巻として正保版本『悦目抄』（もしくは正保版本に近い写本）により②を補った結果、①②③を完備する写本が

再び生まれた。その本を十巻構成にして、『和歌無底抄』と題したものが延宝版本『和歌無底抄』であり、これが『日本歌学大系』第四巻の活字テキストの底本となっている。『日本歌学大系』は、唯一の活字テキストという点で貴重ではあるものの、その底本とする版本は、テキストが成立したであろう鎌倉期からは遙かに下った、江戸期に整えられたテキストであり、利用の際には注意が必要である。また、はじめに述べた通り、『日本歌学大系』同巻は『悦目抄』も翻刻するため、内容②の部分は翻刻されていない。しかし、『日本歌学大系』所収『悦目抄』は所謂広本系に属する応永三十二年本が底本となっている。版本『和歌無底抄』の巻四〜七の基になったのは記事の少ない略本系『悦目抄』であるので、『日本歌学大系』同巻の『悦目抄』を利用しても、厳密な意味では版本『和歌無底抄』の巻四〜七を補うことは出来ないのである。

また、『和歌無底抄』は、『悦目抄』と別個に成立したものは考えられないけれども、②に『悦目抄』が挿入されたのは江戸期とみる点に関しては、部矢氏の見解は妥当であったのである。

七、冷泉流の書として

ともあれ、以上の検討により、『和歌無底抄』諸本奥書は、龍大本のように起請文・基俊・釈阿・藤原氏と続いて、二条家の人名を記さない未改編奥書が、古態を示すことが明らかになった。

第二節で述べた通り、和歌無底抄系諸本は『悦目抄』の奥書を借用しているのが妥当で、奥書を借りるに際し、『悦目抄』にあった為氏・為世という二条家関係者の奥書を削除した、ということになる。また、起請文を基俊奥書の前に持つてくることよって、起請文の記者が為氏から基俊へと改められている。これらの処置は、意図的に「二条家の書」という性格を消そうというものと思われぬ。即ち、『和歌無底抄』諸本は、『悦目抄』という為世流の秘伝書に拠ってはいるものの、原初的には非二条流において作られた歌学書ではなかったかと思われてくる。

そこで、原型に近い未改編奥書本諸本の奥書を見ると、興味深い点に気づく。

IV 佐々木孝浩氏蔵本は室町期の書写になる注目すべき伝本で

あるが、左のような相伝系図が付されている。

釈阿―藤原氏―為相―康成(5)

ここに登場する「為相」は二条為世と対立関係にあった、冷泉家の祖として著名な冷泉為相のことだろう。為相から伝授されたという「康成」については未詳である。「三条源少将伯」という傍記を手掛かりにすれば、神祇伯家の資宗王の男に源康成という人物がいるが（尊卑分脈）、為相よりも一世代上の人物であり、年代的にやや不審。兄弟の神祇伯資基王は文永元（一二六四）年に三十九歳で没している。為相の生没年は弘長三（一二六三）年―嘉暦三（一三二八）年である。実際にこの書の相伝に冷泉為相が関わっていたというのは、非常に疑わしく、この相伝系図は偽作と考えた方がよいだろう。しかし、為相の名に権威を見出すような、いわば冷泉流と呼ばれるような人々が伝承に関与した可能性を示唆する点で無視できないものである。また龍谷大学本奥書5に今川範政の名が見える点も重要である。今川範政は応永期に多く典籍の書写校合を行っており、応永二十六年に未改編奥書本『和歌無底抄』を書写したことは確かであろうと思われる。この範政は冷泉為秀門下の武家歌人として名高い今川了俊の兄範氏の孫に当たり、自身も冷泉派の歌

人である。範政が如何なるルートで親本に接したのかは判然としないけれども、『和歌無底抄』は冷泉派歌人の周辺に流布していたらしい。

同様の例として、〈表〉にVとして示した陽明文庫本奥書6に、冷泉派歌人である正徹の名が見えるという点も指摘しておきたい。陽明文庫本は室町後期頃の書写と見られるが、1〜4に他の未改編奥書本諸本とほぼ同様の奥書を記した後に5「上抄抄下」と尾題を付し、その後6「此一帖、左金吾基俊号三卷書之其一歟。尤重宝之抄也。普不可外見也。ノ千松末葉正徹在判」と記す。さらに、この本は後見返しに花押が五つ書かれている。この五つはそれぞれ僅かに異なるが、酷似しており、同一の花押（恐らくは親本に存した正徹の花押であろう）を模写したものかと思われる。その内の一つに「此内如此也」と傍記する。「これが五つの内最も親本の花押に似せて書くことが出来た」ということであろう。この花押を、小松茂美編『日本書蹟大鑑』第七卷（講談社、一九七九）所収の「94 正徹書状」に見られる花押と比較すると、類似が認められるので、陽明文庫本の親本は正徹真筆であった可能性が高い。また、正徹の奥書中に「左金吾基俊号三卷書之其一歟」とあるのは、仮名序を

参照したのではないかと思われるが、陽明本には仮名序は存しない。そうすると、正徹は、龍大本のように両序を持ち内容②を欠いた伝本にも接していた可能性が高い（「其一歟」という物言いからすると、三巻全て備える伝本には接し得てはいないようである）。

何れにせよ、このように、未改編奥書本は、龍大本のような②を欠く形態のものも、佐々木氏本や陽明本のような①を欠く形態のものも、室町前期から中期にかけて、二条派よりもむしろ、冷泉派歌人の周辺で流布していた形跡が見られるのである。^(金吾)原初的には、『和歌無底抄』系諸本は、『悦目抄』の影響を受けつつも、冷泉流の周辺で成り、流布した書物である可能性が高いのである。

次節では、それを内容面から裏付けることが出来るのか、考えたい。

八、『和歌無底抄』③「古今和歌序」本文から考える

〈表〉を見ると、内容①および②の有無は伝本により異なる

が、内容③に関しては何れの伝本も持っていることがわかる。このことから、『和歌無底抄』の核といえるのは③であると言つてよいだろう。この書を考える上で、最も重要なのは③の部分と言えよう。

この③の部分は「和歌灌頂に有覚」と端作して始まるもので、内容は「人丸奉行念誦次第」「伊勢物語極秘」「古今和歌序」の三つの部分からなる。このうち「古今和歌序」というのは、古今集仮名序の問答形式の注である。周知の通り、古今集の仮名序には、二条家説と冷泉家説の相違する箇所がある。古今集仮名序の「いまはふじのやまもけぶりた、ずなり、ながらのはしもつくるなり」という部分の「た、ず」「つくる」をどう解釈するか、という点、さらに「ならの御時」にどの天皇を当てるかという点で、二条家説、冷泉家説は異なるのである。これらの解釈について、『和歌無底抄』③「古今和歌序」が如何なる立場をとっているか、確認してみたい。

まず、「た、ず」については、「不立不断論争」として有名なものであるが、二条家は「絶えず立つ」という意味で「不断(絶)」と解釈するのに対して、冷泉家および京極家説は「不立、すなわち「立たない」と解していた。それでは『和歌無底抄』

諸本の③の「古今和歌序注」がどのような立場をとるか、見てみよう。「た、ず」の解釈に関して、③「古今和歌序」は次のように述べる。^(注)

又「ふじの山も煙もた、ずなり」とは、是にやうくの二義あり。一には、たえたる義也。たえてあるといふ事の久しくありしなり。されば、延喜の御時目出き御代にて、きんきの煙もた、ずといはひて申たる義なり。一には不断の義也といふは、たとへばふじのけぶりはた、ぬ事なり。しかるに、かのかぐや姫ふしはの煙よりはじめてことおこりて、けぶりのことはよみならへるなるべし。それ、ふしはのおこりが禁忌の事也。さればこの御門賢王にてましませば、禁忌のけぶりた、ずなりとは、貫之かけるなるべし。しかるをある義に云、「ふじのけぶりもた、ずなり、ながらのはしもつくるなり」ときく人は、哥にのみぞ心をなぐさめける」と哥をほめ、御門をほめたてまつることばにて侍るを、「けぶりはた、ずなり」とは、たえぬ義にてたえずたつ心にて侍と申人侍りき。この義おほきにちがふ也。
「けぶりもた、ず」とばかりあらば、せめては「さびしさにけぶりをだにもた、じとて」の哥の詞におもひなぞらふ

べきに、「た、ずなり」の「なり」の字が此詞にはちがふなり。「なり」の字が此哥の肝心に侍る時にゆめくよの義につくべからず。哥のならひ、花をば雲といひ、雲をば雪といふ事なれば、「ふじのけぶり」とよみならはせるも、真実にはけぶりにてはなし。かの山のいたゞきに池あり。いつも雪ふりつもれり。日のうら、かなる時は、池より氣

のたつが、けぶりにはたがはずみゆるなるべし。それをけぶりとよみならはせるなり。されば、むかしよりいつか不
断にけぶりとつ事侍る。「たえずたつ」と定りていはん人は古今を委細に相伝せざる物なるべし。信ずべからず。されば、当時もけぶりににたる間、たつとのみおほくよみたり。しかればよの義はしらず、古今集のごとくはた、ぬといはんが本なるべし。かぐや姫の後はたえて久しき事にて延喜天曆の御時は侍りけるなり。

「た、ず」に関しては、二説あることに言及した上で、『古今集』序のこの部分に関しては、延喜帝は賢王なので禁忌の煙も立たないとして、帝を誉める言葉であるとし、「たえぬ（不断）」「たえずたつ」という二条家流の説は間違いで、「たえたる儀」「た、ぬ（不立）」という冷泉家と同様の説をとるべきであると

主張している。これは明らかに冷泉家説寄りであると言えよう。続いて、「つくる」に如何なる注が付けられているか、見てみよう。この「つくる」に関しては、本来は二条家も冷泉家も「作（造）」の解釈を採っていたが、二条家末流の者により「尽」の解釈が主張されるようになったようである。^(註)③「古今和歌序」には次のようにある。

一、「長良のはしもつくるなり」とは、是に二の義あり。一にはつきたる也。そのゆへは拾遺抄の哥に、内裏の障子に長良の橋の柱のあしの中よりくち残てたてるやうをゑにかけるをみて、

あしまよりみゆるながらのはし柱むかしのあとのかたみなりけり

此哥の心にてはつきたる義也。一には哥に云、

つくのにながらのはしもつくる也今是我身をなに、たとへむ

君が代はながらのはしのちたびまでつくりはて、も猶やふりなん

と云哥の心也。此義にて作也。両義ともに不違。其謂は、古今・拾遺の中の間の時代をかぞふれば、世は六代、年は

八十一年にあたる也。されば此序には、かの橋をつくりかへられしことをかき、拾遺にはかの橋の八十余年が間にくちにける事をよめるにや。しかるに「富士の山は煙たえず、ながらの橋はつくる」といふべきに、さほか、で、「た、ずなり、ながらの橋もつくるなり」ときけば哥にのみぞといへるなるべし。和哥の道をひろくをもく申侍りけるなり。古今にも此心なるべし。

先の「た、ず」同様、「つくる」に関しても「作」・「尽」の両説を取り上げた上で、『古今集』では「つくりかへられし」と、即ち「作」の義であるが、そこから八十年余り経た『遺集』では「くちにける事」、すなわち「尽」の義で詠んでいるのではないだろうか、と述べる。要するに古今序では「作(造)」説を採っている訳である。

「ならの御時」の天皇を誰と比定するかについては、次の通りである。「ならの御時」の帝については、二条家説は「文武」、冷泉家説では「聖武」となる。③「古今和歌序」では、

一、問、いにしへよりかくつたはる事はならの御時よりぞひろまりにける。かの御代や哥の心を…(中略)…これは君も臣も身をあはせたりとなんいふなるべし、如何。

答云、かのならの御時よりとは、聖武天皇也。ひろまるとは、万葉集を撰はじめて、よにおほくの哥をかきあらはして、人にしらしめたまふなり。…(後略)

とある。傍線部の通り、「聖武天皇」という説を採っている。文武天皇説は挙げられていない。ここでも冷泉家説寄りの説を採るのである。

冷泉家流説・二条家流説・③「古今和歌序」が件の箇所においてどのような説を採っているかをまとめると次のようになる。

		二条家流説	冷泉家流説	③「古今和歌序」
た、ず	不絶(断)	不立	たえたる儀・たぬ(不立)	
つくる	作(造)・尽*	作(造)	つくりかへられしこと(作)	
ならの御時	文武天皇	聖武天皇	聖武天皇	

*「つくる」を「尽」とするのは二条末流(『頼阿序抄』など)の説。

室町期になると様々な注釈があらわれ状況は錯綜してくるが、本書の生成の時期と重なるであろう、為世・為相の時代の二条・冷泉両家の説は、この表の通りとみて大過あるまい。これを見

れば、③「古今和歌序」が二条流説よりも冷泉流説に近いということは明白であろう。

さらに注目すべきは先に「た、ず」について述べた引用部③「古今和歌序」本文の波線部である。「たえずたつ（不断）」と言う、二条家流の解釈に対して、「この義おほきにちがふ也」と言い、さらに「古今を委細に相伝せざる物なるべし」と強い口調で攻撃しているのである。これは他家の説の非正当性を主張し、自家説の正統であることを主張するものである。『和歌無底抄』は、本質的には、非二条流にして、冷泉流に近い立場の歌学書としての性格を持つものであったと考えられよう。成立時期も、二条・冷泉の両派が相争っていた、為世・為相の存命時期から隔たらない時期であると推測される。^(注2)

『悦目抄』との関係を言うと、奥書を借用している訳だから、『和歌無底抄』というのは、非二条流・冷泉流において、対する為世流の伝書である『悦目抄』をとりこみつつ、成ったもの、ということになる。

猶、改編奥書本系統の諸本は、奥書だけ見れば二条流を装っているのであるが、本文に関しては、右の三説が、冷泉流の説から二条流の説へと改められるという点も無いという点も指

摘しておきたい。この事実は奥書の改編者の意識を考える上で重要である。奥書の改編により、冷泉流の性格を歌学書を二条流のものに変容せしめているかのようであるが、必ずしも改編者にはそのような意識は無く、広く流布してそれなりの權威を持つ『悦目抄』の奥書を、『和歌無底抄』未改編奥書よりも信頼するに足るものと見做したということに過ぎないのではないかと思われる。

おわりに

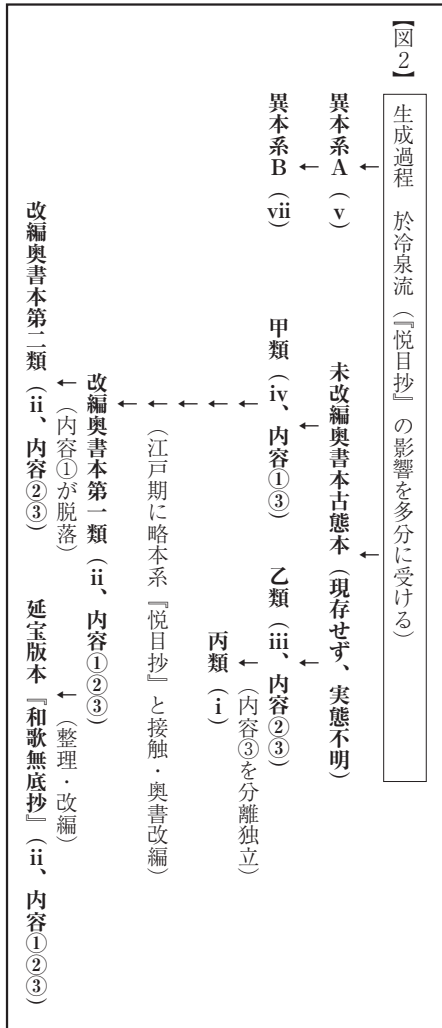
『和歌無底抄』という歌学書は、書物の性格上、諸本の線上的な整理にはもとより限界があるが、最後に、本稿における考察で判明した点を踏まえて、諸本を図式化しておく。第三節で説明した三輪氏の分類でいうところの ii 一子伝系三卷本が改編奥書本、それ以外が未改編奥書本となる。改編奥書本の内、内容①②③を備えるものを第一類、内容①を欠く伝本（群馬大本・大東急本）を第二類とする。未改編奥書本については、iv 一子伝系二卷本（題論＋上抄抄）を甲類、iii 一子伝系二卷本（悦目抄＋上抄抄）を乙類、i 上抄抄系を丙類、v 神宮本系（及び

vi・vii鷺箱極秘抄系)を異本系と名付ける。図示すると、【
2】のようになろう。^(注33)

『和歌無底抄』は従来は二条為世流の伝書としての印象が強かった。というのも、一般に流布している『日本歌学大系』は為氏・為世の奥書を持つ延宝版本を底本としており、三輪氏も、複雑な諸本状況は指摘しつつも、「為世流」という大枠の中で整理したためである。しかし、今回の諸本比較により、二条為世流の伝書である『悦目抄』の影響を受けながらも、実は、そ

れとは対立する冷泉流において成立した書物であるということが見えてきた。また、『日本歌学大系』が底本とする延宝版本は、原初的形態からかなり変形したものであることも明らかとなった。これらの点は、今後『和歌無底抄』を資料として扱う際留意しておきたい。

一方で今後考究すべき課題も多い。まず、異本系とした、三輪氏の分類でいうところのv「神宮本系」とvi・vii「鷺箱極秘抄系」については具体的な考察が出来なかった。【図2】では



線条的に示してしまつたが、異本系Aと異本系Bの関係も改めて考へてみる必要があるだろう。それから、序文において示される三巻の内容構成と原初形態との関係についても不明なままである。また、本稿では『和歌無底抄』に焦点を絞つたが、『悦目抄』をはじめとする、『悦目抄』系歌論全体についての捉え直しも必要であろう。

このように『悦目抄』系歌論の問題は非常に複雑で、依然として判然としない部分が多くある。全てを明らかにするのは困難ではあるが、今後さらなる諸本とその本文を検討することによつて考究してゆきたい。

【注】

- (1) 三輪正胤氏『歌学秘伝の研究』（風間書房、一九九四）。第三章第三節「為世流」において『悦目抄』系について考察が為される。本稿の全般において同書を参照するところが多かつた。猶、以下本稿で言及する三輪氏論はすべて同書に拠る。
- (2) 三輪氏前掲書二三五―二三六頁。
- (3) 同書については、川平ひとし氏「天理大学附属天理図書館

蔵・清水光房『和歌無底抄考―改題と翻刻』（『中世和歌テキスト論』付属CD-ROM所収、笠間書院、二〇〇八）。近世期の研究ではあるが、極めて実証的な考察が為されており、示唆的な点は多い。

- (4) 引用は、龍谷大学蔵『大綱初心』（021・3921）による。龍大本については後述するが、両序を有する伝本の中では最古写本である。

- (5) 『悦目抄』『和歌無底抄』の諸本の様相と課題」（『軍記語り物研究』50号、二〇一四）。同論稿は「非正統的」な「歌論歌学書」の一例として『悦目抄』『和歌無底抄』の複雑な伝本状況を示したものであるが、先行研究の紹介とその問題点について述べた第二・三節が、本稿第二節と概ね重なる。ただし論を進めるにあたって、本稿とは異なる部分を引用し、本稿では略述した点について詳述している部分もあるので、併せて参照されたい。

- (6) 三輪氏前掲書第三章三―四「諸本論にかえて」。
- (7) 『和歌三重大事』については、三輪氏前掲書のほか、酒井茂幸氏『和歌三重大事』の諸本と成立 付校本『和歌三重大事』（『研究と資料』45、二〇〇一）も参照。

(8) 広本系と略本系の異同については『日本歌学大系』所収の「改題」を参照されたい。猶、『日本歌学大系』が底本として久曾神昇氏旧蔵応永三十二年本は現在慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に所蔵される。特に断らない限り本稿における『悦目抄』引用は同本に拠る。

(9) 「龍谷大学所蔵『足利義尚所持本『大綱初心』』について」(『国文学論叢』38、一九九三)。

(10) 陽明文庫蔵『上抄抄』(近243・31)、佐々木孝浩氏蔵『和歌』(外題)がそれに当たる。

(11) 三輪氏はここに陽明文庫蔵『上抄抄』の下巻も挙げているが、やはり陽明文庫本はiii一子伝系二巻本(悦目抄+上抄抄)に属する伝本であると考えられるので、本稿ではここには挙げない。

(12) 以下列挙する伝本は、実見もしくはマイクロ資料により確認したものである。書写年代について、原本未見のためマイクロフィルム・紙焼き写真の印象により推定したものに「カ」を付した。

(13) 出版者を「林文蔵板行」とする伝本も存する。両者は同板で「林文蔵」とある方が後印のように思われるが、版本「和

歌無底抄』の伝本整理は今後の課題としたい。猶、本稿における版本『和歌無底抄』の引用は東北大学狩野文庫蔵林左兵衛刊本(第4門¹⁰⁴⁴⁸・10)に拠る。

(14) 下冊尾に8「延宝第四仲夏日」江戸藩書局蔵「林文蔵板行」と刊記が写されていることから明らかである。

(15) 刊記こそ写されないが、漢字仮名の宛て方に親近性が認められるほか、一部ではあるが版本に存したと思しい振り仮名がそのまま見えることから、版本の転写本と考えて差し支えないだろう。

(16) 「神宮本系」の本文の特殊性や他の伝本との異同については、三輪氏前掲書に詳述されているので参照されたい。

(17) 龍大本をはじめとして、「大綱初心」という内題を持つ伝本が多いが、これは内容①のみにかかる題であろうから、全体を包括する題とすることは出来ない。同様に「上抄抄」も内容③のことを言うものと考えられ、通行書名とするには聊か難がある。版本『和歌無底抄』内題が「一名」として示す「一子伝」という題に関しては、後に注(25)で示すように『了俊歌学書』等に見え、古くから行われていた形跡がある書名で、少なくとも『和歌無底抄』よりは適切

ではあろうか、如何であろうか。この問題は今後の課題としたい。

(18) 基俊奥書のみを記す宮城県立伊達文庫本等の例外もあるが、それは転写に際して奥書が省略されることよって生じたものと見て良いだろう。

(19) 名古屋大学の奥書構成は次の通り。年記・署名部分のみを並べる。

- 1 立申きしやうもんの事
- 2 年月日 前左衛門佐基俊在判
- 3 年月日 釈阿在判
- 4 嘉禄元年月日 藤原在判
- 5 弘安二年春日 妙阿在判
- 6 正安四年七月下旬

7 本云于時 嘉暦三年七月十八日於宮中之宿館以或人之証本書写畢

8 同月廿五日一校畢

9 于時 応安七年卯月一日：皇太神宮祢宜荒木田神主経直在判

10 応永十三年三月九日 在判

11 皇太神宮祢宜荒木田経博神主 主桂寛／于時文明五年卯月廿三日書之

12 天文二年季秋日書之 藤沢二寮弥阿

13 天文三甲年沽洗十三日上章執徐 春行軒於鳩原被写 畢／右筆宋竹入道

14 弘治元年卯月清書之 浄阿上人

この1〜6までは内閣文庫本と同じ奥書となっている。このうち6は『悦目抄』には見えない独自の奥書であるので、6に見える「正安四年」という年記が、この系統と他の系未改編奥書本とが分岐した時期の目安となろうか。

(20) 現存伝本の多さがそれを裏付ける。

(21) 正保二(一六四五)年刊『悦目抄』と寛文六(一六六六)年刊『更科記』の二種。

(22) 正保版本『悦目抄』の引用は慶應義塾図書館蔵本(124・6・1)を利用した。

(23) 奥書の他にも、証歌の順番が異なる等の微細な異同も指摘出来る。このような点を考慮すると、正保版本そのものではなく、そのもとになった写本と近親関係にある本であるように思われるが、断定は出来ない。

(24) 既に述べたとおり、内容①の前に存する仮名序の語る書物全体の構成と同様な構成をとる伝本は現存しない。この

問題について清水光房『和歌無底抄考』は、「此作者ハジメ先サマノ事トモ書テント思ヒ企テ、名目ヲ立オキ、次々物セント思ヒツレド、力オヨバデ半ニシテヤミシ、ドケナキ草稿ノ世ニ伝ハレル歟。又ハ右ノ題目ノ如ク序デナセル本モアリツレド、錯乱シ、且脱落セシニモアラン歟〔前掲の川平氏翻刻による〕と述べる。内容①の内題が「大綱初心巻第一」とあるにも関わらず、「巻第二」以降がどこにも見えないことから、未完成のまま流布してしまった書物に増補を加えて成ったもの、という印象が強い。何れにせよ、原初的形態がどのようなものであったかは不明、かつ現在確認し得る諸本からそれを窺うことは困難である。

猶、版本『和歌無底抄』に存する仮名序は、この全体構成を説明する部分の本文を欠いている。この序の述べる全体構成は、実際の構成とは異なる訳であるから、全体の整合性をとるために削除されたとみて間違いない。

(25) 筑波大学本にも同様の相伝系図が存する。筑波大学本には佐々木氏本と同様に6「文保元年八月廿二日書之」という

奥書を記すが、その後に朱筆で「同九月一日移朱点了」とある点が異なる。

(26) 井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 室町前期(改訂新版)』(風間書房、一九八四) 参照。

(27) 今川了俊『了俊歌学書』の「回文哥」について述べた部分に、「基俊朝臣の一子伝と云記を披見して納得せり」と述べ、以下『悦目抄』の内容を踏まえた記述があるが、これは『悦目抄』ではなく、未改編奥書本『和歌無底抄』の内容②を見ていたものと見るべきだろうと思われる。『了俊歌学書』本文は冷泉家時雨亭叢書に拠る。

(28) 片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題』全六巻七冊(赤尾照文堂、一九七一〜一九八七) 参照。

(29) 以下、本文の引用は龍大本を用いる。

(30) 小川剛生氏「南北朝期の二条家歌人と古今注説―東山御文庫蔵『二条為忠古今集序注』をめぐって―」(『明月記研究』3、一九九八) 参照。

(31) 例えば、下冷泉持為の講釈を伝えるという所謂「持為注」は冷泉流の注とは言えるが、「たゞず」について「不断」説を採っている。

(32)〔表〕で示したものでいうと、VI内閣文庫本に「正安四年七月下旬」という年記があり、IV佐々木氏本には「文保元年

成稿にあたって数多くの御助言を賜った。記して謝意を示す次第である。

八月廿二日」が見える。為世・為相と同時代に、原初的形態の『和歌無底抄』は出来上がり、流布し始めていたと見られる。

(33)三輪氏は鸞箱極秘抄系については、一卷本と二巻本に分けており、後者を冷泉流と結びつけている。本稿では一卷本と二巻本の諸本については具体的考察を行っていないので、まとめて「異本系B」とする。

※本文の引用に当たっては、私に表記を改めた場合がある。

【附記】本稿は、二〇一三年八月に行われた軍記・語り物研究会二〇一三年大会（於大妻女子大千代田キャンパス）で行われた、シンポジウム「〈諸本〉研究の可能性」における口頭発表に基づき、大幅に加筆・訂正を加えたものである。席上御教示賜った諸氏に感謝申し上げます。また、貴重な資料の閲覧を許可下さった龍谷大学図書館、財団法人陽明文庫、国立国会図書館をはじめとする諸機関に深謝申し上げます。佐々木孝浩先生には、御所蔵の資料の利用を許可いただいたほか、